令和６年度　三次市立八次小学校学校評価自己評価表（最終）

【学校教育目標】　　進んで学び　ともに伸びる　～　自主・協力・創造　～

令和７年２月１７日

中期経営目標		短期経営目標	具体的な取組・方策	評価項目（評価指標）	評価 中間	評価 年度末	結果分析(○●)及び今後に向けた改善策（☆）
確かな学力	確かな学力の定着を図る	主体的・対話的で深い学びの充実を図る。 【主体性・表現力・協働性】	・他者との関わりの中で算数科の見方・考え方を働かせながら、思考を深める。	・児童アンケート（他者との関わりの中で思考が深まったと回答する児童80%以上）	B	B	○授業中に他者との関わり、対話の場面を多く取り入れて考えを深めていった。 ○誤答についてもみんなで考えることで理解も深まっていった。 ●児童アンケート（他者との関わりの中で思考が深まったと回答する児童80%以上）が全体で64%であった。他者との関わりを実感している児童は多いが、考えが深まったと感じている児童の割合は学年が上がるにつれて依然減少傾向にある。 ●児童の振り返りと指導者の授業観察だけでは、対話の質がどの程度深まっているのか評価するのが難しい。 ☆期待する対話の指標（ルーブリック）を作成して、対話の質や思考の深まりを検証していき、授業改善をしていく。
				・単元末テスト（思考・判断・表現の項目で70%以上正答できる児童が80%以上）	B	B	○職員研修で算数科での見方・考え方を働かせる授業について共有しながら進めていった。 ●単元末テスト（思考・判断・表現の項目で70%以上正答できる児童が80%以上）が全体で68%であった。 ●図形領域に課題が大きかった。文章問題の内容がイメージできない。語彙力が少ないなどの課題が見られる。 ☆基本的な知識技能を身につけさせながら、個に応じた指導も充実させていく。継続して算数科の見方・考え方、思考が深まる場面を取り入れた授業づくりを実践していく。
		主体的な学習習慣作り 【主体性】	・主体性を養うための学習習慣作りを行う。⇒基礎基本の定着を算数科で行う。 ・毎週２回、ドリルタイムにデジタルドリルを使って自分の課題に合った問題を解く。 ・年２回、算数科の基礎基本の定着を確認するため、確認テストを行う。	・ドリルタイムの実施（週２回） ・確認テストの実施（年２回）	A	A	○低学年もデジタルドリルの使い方に慣れ、主体的に取り組む姿が見られた。教師が児童に合った問題を配信することで、取り組む問題数や内容の偏りを減らし算数科の基礎基本の定着につなげた。しかし、週２回のドリルタイムだけでは、デジタルドリルを活用しきれていないので、活用の仕方を検討する必要がある。 ○単元末テスト（知識・技能の項目で70%以上正答できる児童が80%以上）が全体で80%であった。目標は達成したが、１学期と比べるとほとんどの学年で数値が下がっていた。問題場面をイメージすることや図形領域での課題が全体的に見られた。 ☆教師が個別の学習の理解度を把握し、下学年の学習内容や既習事項の補充を行う。問題の見直し方や直し方を指導し、児童が粘り強く取り組んだり学習を調整したりできるようにする。来年度は年２回児童との面談を行い、児童が目標設定や取組方について教師と共に振り返ることで主体性を養う。
豊かな心の育成	安心して学べる環境のもと、主体的に行動する児童の育成	居心地のいい学校（学級）づくり	・共感的人間関係を育てる学級経営を進める。 ⇒互いを認め合う場や子ども一人一人のよさが見える活動等を設定する。	・児童アンケート、i-check 項目「あなたががんばった時、友だちからがんばったね、すごいね、とほめてもらったことがありますか」【高・中学年】「友だちから、がんばったね、すごいねとほめられて、うれしかったことがありましたか」【低学年】 （肯定的回答85%以上）	B	B	●全学年の平均は80.9%だった。（1年84%、2年86.7%、3年63.2%、4年72.3%、5年90.9%、6年88%） ○授業内外を問わず、教師が子どもたちの価値ある行動に着目して、良さを認める働きかけ（よいこと見つけ、ほめあう活動など）を行った。 ●自己肯定感が低い児童や学習性無気力の児童がいる。他者からの働きかけを受け止めることができない児童に対してアプローチを考えていく必要がある。 ☆今後も児童会が中心となって児童同士が関わり合える活動を進めていく。 ☆教師が児童を認める関わりを続けていくとともに、児童同士をつなげる取り組みをしていく必要がある。
		基本的な生活習慣の確立	・基本的生活習慣の定着を図り、児童の自律心を高めていく取組を進める。 ⇒定期的な振り返りと評価	・「キャリア・ログ」をもとに、自己目標を設定させ、定期的に振り返らせる。(ex.日々、週ごと、月ごと、学期末) ・学期末に自己目標達成、取組過程の状況を自己評価（児童アンケート肯定的回答85%以上）	A	A	○全学年の平均は84.7%だった。（1年93%、2年88.5%、3年90.7%、4年90.6%、5年80.5%、6年77%） ○キャリア・ログや、各学年独自の振り返りシート等を有効活用し、自分の目標を意識して、継続的に取り組む児童が増えている。 ○廊下の通り方はおおむね良くなった。 ●教師から見て、学校内外でのあいさつが、できていない児童が多い。 ☆校内でできているあいさつを校外に広げる取組を行う必要がある。 ☆児童会の目標設定や取組を通じて、地域においてもあいさつができる児童を育成する。 ●雨の日の校内での過ごし方が課題であったが、少し改善された。しかし、見えないところで良くない過ごし方をしている児童が少数いる。 ☆雨の日、雪の日の過ごし方について今後も、教師が継続的に指導していく必要がある。
信頼される学校づくり	「この学校で学ばせてよかった」と思われる学校づくり	保護者や地域からの関心・信頼度の向上	・積極的情報公開 「YATSUGILETTER」等の定期発信、保護者連絡ツール「tetoru」の活用	・保護者アンケート「積極的な情報発信」「学校満足度」（保護者アンケートにおける肯定的回答90%以上）	B	B	○保護者アンケート「積極的な情報発信」「学校満足度」の肯定的回答は、中間評価よりも若干下がり、80.9%、91.0%であった。 ●情報発信では目標値を上回ることができなかった。学年通信を tetoru で配信したり、「YATSUGILETTER」でも各学年の様子を発信したりしたが、より多くの人に見てもらうことはできなかった。 ☆学年だよりは必要に応じて、紙媒体での配布と tetoru での配信を使い分け、より多くの人に見てもらえるように工夫する。
			・コミュニティ・スクールを生かした教育活動の充実 ・働き方改革の推進 専科指導時間の効果的な運用、業務改善のアイディアの交流	・学校教育活動への参加 ・教職員アンケート （「子供と向き合う時間が確保できている」肯定的回答70%以上）	B	A	○「学びの応援団」の人数も増え、家庭科の学習を中心にたくさんの方に学習補助をしていただいた。児童の様子を知ってもらったり、児童も地域の方々との会話やふれあいを楽しみながら活動することができた。 ☆今後も「学びの応援団」の拡大や学校運営協議会との連携を継続し、より充実した活動になるよう取り組んでいく。 ○働き方改革については、時間外勤務時間は昨年度に比べ、全体の時間、月45時間を超える職員の数は減少している。「子供と向き合う時間が確保できている」と肯定的な回答をした職員は全体の73.1%で、中間評価よりも7%程度増加した。 ☆今後も業務分担や日課の見直し、デジタル化の推進、意識改革などに取り組み、さらに子供と向き合う時間を確保していく。

（自己評価）A:100≦（目標達成）　B:80≦（ほぼ達成）＜100　C:60≦（もう少しで達成）＜80　D:（未達成）＜60